

幕内瓦版 第貳拾五号

発行 日本劇場技術者連盟



幕内：劇場の幕内側のことで、演者・大道具・小道具・衣装・照明・音響など、舞台を創造するものの総称

■ 日本劇場技術者連盟の 法人化計画始まる【報告】 編集委員会

現在、日本劇場技術者連盟は任意団体です。連盟の活動内容に賛同していただいた方の集まりという趣旨のため、法人格を持っていません。設立から八年半を経過し、その間、劇場技術者の技術力とステータスの向上を掲げて活動してきました。

しかし、全国各地の公立文化施設での活発化が進み連盟の存在も大きくなりつつある事と、関係及び交流する諸団体にも少なからぬ影響がある事をふまえ、法人格取得の議題が浮上してきました。

去る9月2日、齋藤理事長始め近隣の理事・役員及び会員有志と大阪から山形裕久副理事長が集まり、法人化に向けての意見交換会が行われ、「一般社団法人」を目指すという方向で話が進みました。

<法人化一問一答>

Q. なぜ、法人にする必要があるのですか？

A. 劇場・ホール施設や機構・設備の飛躍的向上により、業界団体の中で連盟が担う立場が重要になりつつあります。とくに、舞台技術者の多くがいまだ分散孤立している状況を打開するためにも、連盟が他団体と同じ土俵で意見を言えるようにしておく必要があると考えられたからです。また、文化面で地方創世に寄与するためには、さらに連盟の事業を広めて推進して行かなくてはならないでしょう。そのための行政等からの補助金等の受け皿となるためにも、法人格が必須の状況になってきております。

Q. なぜ、「一般社団法人」なのですか？

A. 法人格には「一般社団法人」「NPO法人」「公益財団法人」などの種類がありますが、設立費用が少なく、手続きも簡単な「一般社団法人」を当初は選択することが、連盟にとっては現実的であろうと判断致しました。

Q. 法人格を取得すると会員にはどんな影響がありますか？

A. 事務局を整備すると同時に事務経費等が今まで以上にかかると予測されるため、若干の会費値上げをお願いする可能性があります。ただし、連盟の趣旨を御理解いただける法人等にも参加や協力をお願いするようにして、負担の少ない会費で運営する方針は変わりませんので、さほど高額になることはありません。

Q. 理事長から会員の皆様にメッセージはありますか？

A. まだ、動き出したばかりの法人化計画ですので、詳細は今後理事会で協議し、決定致します。進捗状況は、ホームページ等でもご報告致します。ご理解、ご協力下さいますよう、是非よろしくお願いいたします。

以上のように、日本劇場技術者連盟は新たな飛躍の節目に来ているようです。

■ 特別企画「歌舞伎鑑賞会&バックステージツアーin国立劇場」の報告

埼玉県 米本麻紀子

伝統芸能の殿堂「国立劇場」で歌舞伎を鑑賞後、普段は決して入ることの出来ない舞台裏まで見学出来る、歌舞伎入門ツアーが、

2014年7月8日（火）に実施されました。

歌舞伎の魅力を気軽に体験出来る「歌舞伎鑑賞教室」は86回目。「歌舞伎のみかた」（約30分の解説）に始まり、演目は「傾城反魂香」的一幕「土佐将監閑居の場」です。14時に大劇場入口に集合してみると、開演を待つ高校生や海外からの学生などで大変な賑わいでした。

満場の観客の中、空の舞台が照明で浮かび上がると、盆が回る（廻り舞台は18世紀に日本で生まれた舞台機構）と共に、大中小のセリが次々に上がっては降ります。ダイナミックな機構操作の演出から始まった「歌舞伎のみかた」は、歌舞伎俳優の澤村宗之助氏をナビゲーターとして、歌舞伎の特徴を分かりやすく案内してくれました。その中で興味深かったのは、同じ筋書きの芝居の一場を新劇の舞台方式と歌舞伎の方式とで続けて上演し、比較してみようという場面でした。幕が開くと、突然舞台に新劇風の山小屋の書割が現れ、雨や風の「SE」がなんと「スピーカーから」流れ、澤村氏が迷った「登山者の服」を着て現れます。「新劇風の」芝居をし、同じような場面を今度は歌舞伎の方法で上演し直す、という趣向です。歌舞伎の殿堂の国立劇場でこのようなお遊びが見られるという意外性。大変粋に、面白く感じられました。

続く傾城反魂香（けいせいはんごんこう）一幕・土佐将監閑居の場（とさのしょうげんかんきよのば）は、宝永5年（1708）に人形浄瑠璃として初演され、享保4年（1719）に歌舞伎に移された近松門左衛門の作品です。

どもり癖のある絵師の浮世又平（うきよ・またへい）は、絵の師匠が弟子に「土佐」の名字を名乗ることを先に許したことを知って、自分にも名字が欲しいと、おしゃべりな妻を通訳にしてゴネにゴネますが、彼はこれといって褒められることをしたわけでもないため許されません。言葉が不自由なお前では高貴な方の相手をする絵師は無理と師

匠にきっぱり断られてしまいます。すっかり落ち込んで妻と心中することにしますが、妻に乞われて最期の作品を残そうと石の手水に自画像を描くと、その気合いが筆からほとばしり、なんと描いた面と反対側の壁に自画像が突き抜けて浮かび上がったので、師匠もその作品を見て又平に名字を許したのでした、というお話です。

石の手水に後見が仕込みで入っていたのは分かったのですが、しかしどういう仕掛けで絵が浮き出るのは分からずじまい。さすがのイリュージョンと感じ入りました。

さて、17時からはお待ちかねのバックステージツアーです。講師として、国立劇場舞台技術部副部長の松尾宰氏をお迎えし、上手先行組（照明側）と下手先行組（音響側）2班に分かれ、客席後ろの上手下手側にある調光室、音響室を訪ねました。伝統芸能を支える裏方は、最新鋭の技術が詰まった、ハイテクの殿堂で働いていたのでした。

調光室でひときわ目を引いたのは、入って右側の壁にそそりたつ、大劇場の立盤型プリセットフェーダ盤（東芝ライテック製）です。フェーダーが240本×3段、壁一面にびっしりと並び立って偉容を誇っています。高野課長補佐のご説明では、日本舞踊の会などで準備ができずにぶっつけで本番になる場合もあるが、そんなときにこの盤は大変役に立つということでした。

音響担当の石井課長のお話からは、この音響室は目線が舞台と同じラインにあるので、とても芝居に気が入りやすく、操作もしやすいところが良いというお話に納得。また、いかにSRしていないように心地よく良く聴かせるかということに苦心されているということでした。そして最新のデジタル機器では基板などの一部部品の不良が起こった場合に、昔のように簡単に部品交換で済ますことができないことがあるそうです。さらに、システム全体に問題が波及してしまうことが

あるため、管理には以前よりも一層神経を使うようになっているとの説明を受けました。

その後、松尾氏のご案内で「鳥屋」や「揚幕」、花道七三にある「すっぽん」などの解説などを交えつつ、国立劇場の舞台機構を見学。なんと先だって「歌舞伎のみかた」で見た、セリの上に乗せて頂きました。大セリで上昇しながら同時に盆でぐるっと一周してみたり、同じセリで奈落にまで降ります。そこには、幕類や大道具類のさまざまな倉庫があり、国立劇場美術部のアトリエ（製作場）になっている場所もありました。実際に舞台の上の照明と同じ照明を製作場では使い、色味を統一しているというご説明も受けました。さらに、吊り物や床機構制御盤、大奈落で自動車のエンジンにあたる電動モーター機を見学するなど大変貴重で有意義な体験が得られました。

その後の懇親会では、参加された皆さまがさまざまな感想を交えながら、満足感いっぱい楽しく歓談されていました。

■みの～れ「舞台美術ワークショップ」報告 埼玉県 米本麻紀子

2014年8月18日（月）14時より、小美玉市四季文化館みの～れにて、日本劇場技術者連盟後援の「舞台美術ワークショップ」が開催されました。

講師に舞台美術家の滝善光氏（連盟理事）を迎え、みの～れの舞台技術サポートチーム「スタッフエッグ」のメンバーをはじめ、中学生や住民劇団の皆さん、住民劇団に参加しているお子さんの保護者の方々、園児による上演に熱心な保育園の先生と多彩な顔ぶれが参加し、さらに連盟会員の大仲芳男氏も駆けつけて下さりました。

まず、四季文化館館長の山口茂徳氏、連盟会員で四季文化館舞台技術管理マネージャーの阿部喜一氏のご挨拶を頂き、主催のみの～れ支援隊「スタッフエッグ」のメンバー紹介

と、講師紹介として滝理事、齋藤理事長のご挨拶と連盟会員の皆さんの紹介の後、舞台へ移動してワークショップの開始となりました。



今回は、近々みの～れで上演される住民劇団のミュージカル「黄色い袋と魔法のトンネル」を題材に取り上げ、舞台美術ができるまでのプロセスを聴講、体験しました。

滝理事は「舞台美術のできるまで」と題し、最近取り組まれた、大劇場ミュージカルの舞台の各景ごとの立面図や、みの～れの劇場の縮尺版グリッド模型などを展示しながら、舞台美術セクションの、公演までの大まかな仕事の流れを解説されました。（なお、この模型は四季文化館に寄贈されました。）



その後、受講者は各班に分かれ、受講者は10月にみの～れで公演される住民劇団によるミュージカル「黄色い袋と魔法のトンネル」の世界観を、みの～れ住民劇団・演劇ファミリーMyuのスタッフの皆さんの説明を元に、それぞれ模造紙に地図として描き、台本に描かれた、ファンタジーの世界を作品として立ちあげていく課題に取り組みました。

最後にお手本として、ある班が考えたアクティングエリアの図をもとに、滝理事が舞台平面図を書いて下さいました。製図用定規を駆使され、あっという間に舞台平面図が出来ていく様子に、皆さん、目を見張っていました。

連盟会員の新鮮便

■ 技術の交流

島根県 スサノオホール 桑原 基紘

夏の暑さが緩み、朝晩はめっきり涼しくなってきましたが皆さんは体調など崩されていないでしょうか。とはいっても、今年はあまり『夏』らしい日が無かったように感じます。晴れたと思えば、曇り始めて雨が降り…の繰り返しでした。島根県内においてもその雨の影響から大きな夏祭りなども順延や中止になったりして、主催された団体さんや実行委員会の皆さんは天候を気にしながらでご苦労をされたと思います。

さて、これから秋に近づくにつれて文化イベントも比例して数が増えてきます。特に当地「出雲市」は、旧暦 10 月からにわかに活気が出てきます。というのも他県と違い、旧暦 10 月を「神在月」と呼んで神々が集う土地として各地で文化・スポーツなどのイベントが開催されるからです。なぜ「神在月」かということ、ご存知の方も多いと思いますが、全国の^{やおよろず}八百万の神々が当地出雲へお集まりになられるからで、逆に他県では神々が留守になるということで「神無月」と呼ばれます。ただ、イベントが増えるとそれだけ舞台技術者も必要となり、ひいては各館イベント時に必要不可欠な技術者の人員確保が難しくなるという弊害も出てきます。いわば、舞台技術者の取り合い状態です。この状況に毎年各館頭を痛めていた状況でしたが、もともと島根県下では技術者が他館へ行き来して技術の交流というものが結構頻繁に行われてお

り、そのおかげで当方も人材確保の難題を乗り越えられたことが過去幾度となくあります。そして今年度より県立文化施設を管理されている財団さんによる『技術者同士の連携』を主とした事業も展開されてき始め、今後少しずつ人員確保の難題が緩和されていきそうな予感はしております。イベントを安全かつ円滑に遂行するためには、必ず各セクションに舞台技術者の配置が必須です。今後も他館との連携を図り、技術はもちろんのこと単純に人と人との交流も深めていけたらと思います。

連盟からのお知らせ

■ メールアドレスを変更しました

日本劇場技術者連盟のメールアドレスを下記の通り変更しました。ご承知ください。

renmei-honbu@teec-or.jp

■ ご要望をお待ちしています

研修会、セミナーについて内容やテーマのご要望がありましたら

renmei-honbu@teec-or.jp まで

ご意見もお待ちしています。

■ ホームページもご覧ください!

日本劇場技術者連盟のホームページには、会員にとって役立つ情報が満載です。是非ご覧ください。

<http://www.teec-or.org/>

● 幕内瓦版 25 号

発行日: 2014 年 10 月 18 日

発行: 日本劇場技術者連盟

発行人: 齋藤 譲一

編集人: 阿部 喜一

編集委員: 桑原基紘・庄司 至

増田哲也・山下祐治・米本麻紀子